

漢文訓読における送り仮名

体系的説明の試み

古田島洋介*

本誌第十一号所載の拙稿「訓読文を読む順序」で、送り点付きの訓読

文を読んでゆく順序について理論的整備を試みたが、そもその発想は「漢文訓読の何たるかをわきままえぬ宇宙人のごとき学生に対して、送り点付きの訓読文を読んでゆく順序を明快に説明できるか」であった。本稿では、これをもう一つの訓点、すなわち送り仮名について適用してみよう。むろん、広い意味で訓点と言えば、句読点・返り点・送り仮名の三者を指すが、レ点の使い方さえおぼつかない学生が白文に句読点を付ける場面など想像すらできぬのが現状だ。かつての漢文教師は白文を教行示して「句読を切れ」と記せば試験問題など一丁上がりだったらしいが、今となっては夢のまた夢。返り点が正確に使え、送り仮名が一応それらしく振れば、大満足とすべき御時世なのである。

然り、送り仮名を「それらしく」振ることは、現今の学生にとって至難の業だ。すでに訓読口調がはるかに耳遠い存在となり、「こんなふう

に読んでおけば、いかにも漢文訓読らしい響きだ」との判断がまるでつかないからである。しかも、これは学部生の段階にとどまらず、もはや優秀な大学院生にまで当てはまるのが実情だ。

ここ数年、私は月に一回の割合で開かれる漢文訓読研究会に参加しているが、そこに集まるのは、国立大学の筆頭と目されているT大学や私立大学の雄とされるW大学など、いわゆる有名大学の中文科で学ぶ大学院生が大半を占める。中文科では古典中国語すなわち漢文まで現代中国語で発音してしまうため、訓読力を養うことができない。そのため、少しでも訓読力を身に着けたいと、漢文訓読研究会に参集するわけだ。さすがに聡明な大学院生たちだけに、中国語の感覚をよく理解しており、わけのわからぬ誤読を犯すことはほとんどない。けれども、訓読そのものがいかにも訓読らしい型にはまっているかとなると、いささか怪しい場面も時折り目につくのである。

たとえば、「唐」柳宗元の一文を読んでいたとき、某君がある動詞を「くしけり」と訓読したことがあった。一瞬、おやと思っ

て見回したが、怪訝な顔をしている者は一人もいない。そこで、私が「現行の漢文訓読では、過去の助動詞へけり」は使わないことになっている」と言うと、そう言えばそうだったという雰囲気は漂わず、こぞって有難いとばかりに覚書を記している。これは大きな衝撃だった。今や、こうした優秀な大学院生にとっても訓読口調が耳遠い存在となってしまったのかと思うと、まことに暗澹たる心持ちだったのである。

もちろん、かかる惨状を招いた最大の原因は、教育関係諸機関あげての漢文殺しにほかならない。漢文なぞ無用の長物とばかり、中学や高校でまともに訓読を指導せず、大学でもろくに教えぬとなれば、訓読の骨法を知る機会はどこにもないのである。

しかし、漢文教育の衰退は時勢の然らしむるところとはいえ、それを

除けば、漢文訓読の最大の敵は漢文教師の指導法そのものなのかもしれない。論より証拠、右に紹介した私自身の台詞が、漢文教師の通弊を如実に表わしていないだろうか。「こう読むことになってるんだから、このように訓読しておきなさい」「そうは読まないことになってるんだから、そのような訓読はやめなさい」——程度の差こそあれ、何かにつけて日々このような指導が教室で行われているのではないか。つまり、生徒・学生が間違えるたびに、その場かぎりの知識をちびちび小出しにし、いつまで経っても訓読の全貌が把握できるような実用的かつ体系的な説明を行おうとしないことこそ、漢文教師の指導法を以て漢文訓読の最大の敵と為すゆえんなのである。

むろん、かく言う私も、ちびちび小出し派の典型だろう。実際、「過去の助動詞へけり」は使わない」と口にしながら、いったい文語の助動詞としてどれを用いどれを使わないのか、ただちに説明に及ばなかったからである。なぜ、即座に説明しなかったのか。他無し、自分でも知識が整理できておらず、明確に説明する自信がなかったからである。説明しなかったのではなく、説明できなかったのだ。一言以て之を蔽えば、不勉強。怠慢と言ってもよい。このような場当たり指導しか受けられぬ学生こそ最大の被害者であろう。

けれども、教師の不勉強、怠慢は天の見逃さざるところ。このたび、ついに小出しの場当たり指導がまったく通用しない場面に出くわした。平成十六年（二〇〇四）三〜七月、中国は北京日本学研究センターの文学コース派遣教員として、中国人の大学院生に漢文訓読を教えたのである。日本人の学生とは異なり、「漢文訓読は文語を使って読むことになっている」では納得しない。文語文法の初歩を学んだだけの中国人民大学院生に訓読を教える以上、訓読に用いる古語の諸相、訓読に見られる文

語文法の特例などについて、整然たる説明が要求される。私も、これぞ絶好の機会とばかり、小出しにしてきた知識を整理し、どう説明すれば明快に納得させることができるか、乏しい知恵を絞って工夫することになった。以下、そのささやかな成果を披露したいと思う。今なお何かと不備が目立ち、実用的かつ体系的と称するには程遠いが、指向するところは御理解いただけるだろう。関係各位の御参考になれば幸いである。

一 形式上の問題

まずは形式上のことから片づけてしまおう。

送り仮名の書式は、「文語文法に則り、歴史的仮名遣いで、原文の漢字の右下に小さく片仮名で付ける」と説明されるのが一般である。送り仮名の位置や字の大きさ、および用いる仮名の種類については、あれこれ穿鑿してみてもさして実りがあるとは思えない。現行の送り仮名に関するかぎり、すでに自明の常識だからだ。稀には漢字の左側に送り仮名を付け、右側に返り点を振る学生もいるが（いったい中学・高校でどのような指導を受けていたのだろうか）、まったく例外中の例外にして、取り立てて気遣う必要はあるまい。片仮名の発生そのものが漢文への書き込み用とわかれば、字の大きさと仮名の種類については、ただちに納得できるはずである。書き込む場所も、縦書きの文章における視覚の生理から見ても、右下というのが自然な位置だろう。となれば、あとは文語文法に注意して、歴史的仮名遣いを間違えずに振れば事無きを得たりとなりそうだが、例によって一事として容易なるは無し、そう簡単にはゆかぬのが実情だ。なぜなら、送り仮名の形式にとって、右のごとき書式や表記の原則よりも、むしろ具体的な表記の問題が厄介な存在だからで

ある。つまり、読みのどこからを送り仮名にするかという問題こそが、何かと形式上の紛糾をもたらすのだ。

一般に、送り仮名の付け方は「原則として、活用語は活用語尾から送り、副詞・連体詞・助詞・接続詞などは、最後の一字だけを送る。ただし、現今では必ずしも統一されていない」(東京都高等学校漢文教育研究会「編」『新補 漢文提要』一五頁、新塔社、昭和六十二年)と説明される。けれども、自ら但し書きを付して「現今では必ずしも統一されていない」と述べているように、実際の場面では不統一による無益な混乱が少なくない。今、煩を避けて、そうした紛糾の実情をあれこれ並べ立てるのは差し控えよう。実際、枚挙に遑がないうえ、まったく実りのない徒勞に終わるのが明白だからだ。ただちに、これ以上つまらぬ混乱を招かぬよう、二つの提案を記すこととする。

第一は、送り仮名については結果主義を以て臨むべきこと。ここに謂う結果主義とは、送り仮名をどう送ろうが、結果として正しい読みが得られさえすれば、いずれの送り仮名をも許容せんとする態度を指す。つまり、原則どおり活用語尾から送れば「曰ハク」「以ツテ」「来ル」となるものの、「曰ク」「以テ」「来タル」も十分に許容せよ、ということだ。事実、私自身は「曰ク」「以テ」「来タル」と送る習慣であり、この送り仮名を用いた拙稿について読者その他から咎められたことは一度もない。たしかに、「曰ク」「以テ」では活用語尾が漢字に隠れてしまい、「来タル」は語幹の「タ」が送り仮名にはみ出ている。けれども、かつては「曰ク」「以テ」こそ「曰」「以」の送り仮名としては常態であった。また、現今、「来ル」では「くる」と誤読する学生が少なくないため、「来タル」のほうが安全なのである。こうした送り仮名を排斥されてはたまらない。もし原則によって排斥されるのであれば、その原則こそが誤り

なのである。

そもそも、通常の日本語の文章でも送り仮名は厄介な存在で、どこまでを振り仮名すなわち漢字の読みとし、どこからを送り仮名とするかについて一定の法則があるわけではなからう。これを漢文の場においてのみすっきり整理できるわけがないのである。「行う」にせよ「行なう」にせよ、とにかく「おこなう」と読めさえすればよいとの一般常識を漢文訓読にも適用し、寛容な結果主義を以て臨むのが妥当な態度だ。実際、私は右の記述のなかで二回「以て」と記しているが、看過しがたい抵抗を覚えた向きは皆無だらう。

「立ニ」と「立チドコロニ」についても同様である。副詞に関する原則どおり、最後の一字だけを送れば「立ニ」となる。しかし、現在、それこそたちどころにこれを「たちどころに」と読める学生はほとんどないだろう。やはり「立チドコロニ」のほうが親切である。長々しいとはいえ、誤読を防ぐに如くはない。吉沢康夫『新漢文の基本構文130』(三省堂、平成三年)一二頁のように、「立チドコロニ」のごとき送り仮名を初心者用と説明するのも一法だろう。けれども、どう説明するにせよ、その原則は結果主義に基づく寛容に依るべきだ。「立ドコロニ」「立コロニ」「立ロニ」も、すべて許容しなければいけない。「たちどころに」と読めてさえいればよいのである。さすがに、一つの訓読文のなかに「立ニ」と「立チドコロニ」が混在するような不統一は困り物だが。

ある学生によると、高校のとき、再読文字「須」の初読「すべからく」の送り仮名について、国語の教師が「須ラク」しか認めず、「須ク」にも「須カラク」にも減点どころか罰点を食らわし、その学生本人も「須カラク」としたために罰点を頂戴する憂き目に遭ったという。まことに気の毒としか言いようがない。「何だか馬鹿馬鹿しい気がして、全然

勉強する気になれませんでした」と言うのも宜^{むべ}なるかなである。このような厳格さは百害あって一利なし、漢文嫌いを増産するだけだ。結果として「すべからく」と読めてさえいれば、どこから送るかなどという問題は、まったくの枝葉末節にすぎないのである。

第二は、捨て仮名という呼称を復活すべきこと。先に示した原則に忠実に従えば、非活用語たる名詞の読みが送り仮名にはみ出ることはない。しかし、実際には「原ト」のような送り仮名を付けることがある。「もと」と読ませるべく「ト」を付けるわけだが、これには抵抗を感じる学生が少なくないようだ。「すべて振り仮名にして〈原〉^{もと}ではいけないのか？」との質問には、「それでもよい」と答える。とにかく「もと」と読めさえすればよいのだから。しかし、それでも「原ト」に解せぬ印象を抱く学生が数多く残る。送り仮名は活用語尾がらみか助詞・助動詞の類に決まっているとの固定観念があるためだ。

ただし、名詞の読みが送り仮名にはみ出たからといって、すべての語について学生が抵抗を感じるわけではない。同じ名詞でも、動詞の連用形から転じた「群レ」「愁へ」「教へ」などには違和感がないようだ。それぞれ本を正せば活用語尾だからである。

では、「原ト」の類に対する心理的な引掛かりは、どのようにに解決すればよいのだろうか。ここで想起すべきは、送り仮名の旧称・別称である。送り仮名は、明治期には副え仮名（添え仮名）とも言い、漢文訓読の場においては捨て仮名または尻仮名とも称した。このうち、副え仮名（添え仮名）は、いささか漠然と響く語感のうえ、「そえ」というだけに、後述の読み添え語すなわち補読語と混同するおそれがあるので、慎重を期して暫く採らない。また、尻仮名は、少しく下品な語ゆえに使いつらからう。そこで、残った捨て仮名という呼称を現代に復活させ、

「原ト」の「ト」のように、活用語尾に非ず、助詞・助動詞にも非ず、純然たる誤読防止用の送り仮名を捨て仮名と呼ぶことにしたい。たとえば、「半バ」「即チ」の「バ」「チ」なども、すべて捨て仮名である。送り仮名と聞くと、どうしても活用語尾や助詞・助動詞を思い起こすため、もっぱら誤読防止に用いる送り仮名は別扱いできるようにしておくほうが何かと便利なのだ。「来タル」の「タ」のごとく、活用語の語幹が外に漏れ出てきても、捨て仮名として扱える。原田種成氏は添え仮名という呼称の復活を主張していたが¹⁾。

もちろん、送り仮名には、捨て仮名のみならず、活用語尾や助詞・助動詞などの補読語も含まれる。この三者の総称を送り仮名と規定しておけば都合がよい。訓読にどうしても必要な活用語尾や助詞・助動詞などまで含めて捨て仮名と称すると、必要なものまで捨ててもかまわないように聞こえ、実体と名称とのあいだに齟齬が生じるからだ。三者の並び順は次のようになろう。

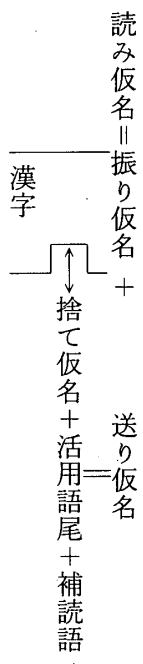
送り仮名Ⅱ捨て仮名＋活用語尾＋補読語

三者それぞれの値は0（無し）か1（有り）である。捨て仮名を必要としない非活用語で、特に読み添えるべき補読語も不要となれば、三者の値の総計は0、すなわち送り仮名は無しとなるわけだ。

もっとも、前述の「原^{もと}」でも「原ト」でも可という話が典型的に示すように、捨て仮名は振り仮名と密接不可分の関係にある。誤読を防ぐべく、振り仮名が漢字の外に漏れ出てきたのが捨て仮名だからだ。要するに、振り仮名と、送り仮名の先頭に位置する捨て仮名とのあいだには、トロンボーンのスライド支柱のごとき可動式の仕切りがあると考えてお

けばよい。決して固定された壁で仕切られているわけではないのである。この仕切りの可動範囲こそ、すでに述べた送り仮名に対する結果主義の寛容さにほかならない。

また、漢字の読みを示すという点では、振り仮名も送り仮名も同等の機能を有しており、時として、送り仮名では読みを十全に示せず、誤読防止のためには振り仮名の登場を待たねばならぬ場合もある。その代表例が「自」で、果たして「みづから」なのか「おのづから」なのか、不明確な場合が多い。一般には「みづから」ならば「自ラ」、「おのづから」ならば「自ツカラ」と送って区別しているようだが、「自ラ」を「おのづから」と読めぬ道理はなく、現今「立ニ」を「立チドコロニ」と記すことが少なくない風潮のなかで、「自ツカラ」を「みづから」と読んだとて、にわかには咎めることはできないだろう。こうした誤読を確実に防ぐには、どうしても振り仮名の動員が必要で、実は江戸時代の和刻本にしばしば見られる「自」「自」のごとき指示こそが最も簡潔で合理的だ。ただし、どういうわけか現代は振り仮名を毛嫌いだする風潮があるため、こうした先人の見事な知恵が活かされていないのは甚だ遺憾である。いずれにせよ、送り仮名を振り仮名と切り離して考えることができない以上、漢字の読みを示す両者を一括して読み仮名と称し、次のように領域を設定しておくのが最も実用的だろう。



この図式では、読み仮名領域を漢字の右側に設定してある。通常の漢字はこれで十分に処理可能だ。置き字については、振り仮名から補読語まで、すべての値が0、すなわち一切の読みがないと考えればよい。ただし、もう一つの特異な読みを持つ字、つまり再読文字については、再読部分を処理すべく、これと同様の領域を左側にも設定しておく必要がある。単なる便宜上の問題で、左右それぞれに読み仮名の領域があるからといって、何か複雑な内容が加わるわけではないけれども。

もっとも、再読文字における左側の読み、すなわち再読部分について、今日、送り仮名のみを片仮名で記すか、それとも読み仮名をすべて片仮名で記すか、訓読者によって形式上の揺れが生じていることは承知しておかねばならぬ。結局のところ、読みに相違が生じるわけではないので、神経を尖らせるような問題ではない。しかし、漢文訓読の花形ともいえるべき再読文字について形式が一定していないとは、いささか腑に落ちぬ話だろう。再読部分の不統一とは、左のごとき二種の方式を指す。いずれも読みは「未だ之有らざるなり」となる。

未^ダ之^ラ有^ラ一^ニ也。
未^ダ之^ラ有^ラ一^ニ也。

上の方式は「未」の再読「ず」の連体形「ざる」の「ざ」を振り仮名に当たると考えて記さず、捨て仮名「る」のみを片仮名で送っている。一方、下の方式は「ざる」をすべて片仮名で記す。近時、学習参考書の類は、下の方式を採るものが少なくない。読みが明確なだけ、読み手に対して親切だからであろう。ここまで親切だと、かえって学習者の学力を見くびっているようにも感じられるが。ただし、親切的措置だからといって、手放しで喜ぶわけにはゆかぬ。

学力を見くびる云々は邪推としてさておくにせよ、この片仮名で記された「ザル」は、振り仮名は平仮名で、送り仮名は片仮名での通則に違反しているからだ。この「ザル」二字は、振り仮名「ざる」をすべて片仮名で記したのか、振り仮名「ざ」と捨て仮名「る」をも片仮名で表わしたものだとか考えられない。いずれにせよ、振り仮名は平仮名で記すとの一般原則に反しているわけだ。〈再読文字の再読部分についてだけ用いる例外措置なのだから、特に目くじらを立てるには及ぶまい。とにかく親切な措置なのだから、有難いと思え〉との趣旨なのだろうか。漢文訓読に時として見られる御都合主義である。読み手に親切なことはたしかだろう。しかし、原則を逸脱してまで再読をこれほど丁寧に示す必要があるのか、甚だ疑問に感じるといのが私個人の偽らぬ感想だ。原則からの逸脱を許すのであれば、前掲の「自」「自」の復活こそ急務ではないかと思うのだが。

二 訓読の語彙

さて、形式上の問題は片づけた。むろん肝腎なのは、先に示した各領域にどの語をどのように入れるかである。錯雑をきわめるため、すっきり整理するのは至難の業だが、奇を衒うことは避け、取り敢えず正攻法で臨んでみよう。以下、まずは語彙、次いで語法、そして文法について考察する。

訓読の語彙は千変万化、とても一律には論じきれない。差し当たり最も整理しやすいのは各種の句型に用いられる語彙だが、これについては数多くの参考書が出版されているので、今、句型を一つひとつ逐ってゆく作業は省略に従う。実のところ、句型は記憶してしまえばそれまでと

いう性質のものであり、読みが固定されているだけに、その語彙は扱いが容易なのだ。日ごろから、たとえば多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』（角川書店、昭和五十四年／〔新版〕国書刊行会、平成十年）を使い、巻末「使用語句索引」を頻々と活用していれば、自ずから句型に用いる語彙が身に着いてくるだろう。句型の語彙は、必要に応じて取り上げるのみとする。

厄介なのは、句型に当てはまることのない一般の語彙だ。つまり、なら変哲もないふつうの文を読むときに、いったいどのような語彙を用いて読み、どう送り仮名を付ければよいのか、これが最も難しいのである。「文語で読むと決まっているではないか」と言うなかれ。その文語が漢文訓読独特の様相を帯びているから厄介なのだ。以下、品詞別に考察を進めてみよう。ここで謂う品詞とは、日本語の文語の品詞であり、原文たる漢文における品詞ではない。

ただし、訓読の語彙を論じるさいにしばしば話題となる和文と漢文における語彙の位相の差について、ここで論じる必要はないだろう。和文と漢文における語彙の位相の差とは、左のごとき諸語について言う。それぞれ／の上の平仮名が和文系語彙、下の片仮名が漢文系語彙である。

指	および／ユビ	甚	いみじ／ハナハダシ
互	かたみに／ダガヒニ	偶	たまさかに／タマタマ
願	いかで／ネガハクハ		

こうした漢文系語彙を、誤って和文系語彙を以て訓読する危険性はきわめて少ないだろう。なぜなら、漢文系語彙はいずれも今日の通常語彙と一致しており、和文系語彙のほうがはるかに耳遠いからである。時と

ともに移り変わる和文系語彙に対し、漢文系語彙は正に漢文訓読を通じて、今日まで安定して伝わってきた。だからこそ、我々にとって身近な語彙なのである。むろん、訓読に用いる語彙を歴史的に研究するのであれば、右のような対照表は有益そのものだ。しかし、現行の訓読語彙について考察するに過ぎず、かかる比較対照作業は不要だろう。ここで目指しているのは理論を主とする通時的研究ではない。あくまで実用本位の共時的研究なのである。

〔名詞〕

名詞は漢和辞典を引けば、たいいていのものは読める。しかも、送り仮名に影響する読みはほとんどない。すぐに想い至るのは次の例くらいである。

憂^へ／愁^へ 憂^へ／愁^へ

現代日本語の感覚では、いずれも「うれひ」と読みたくなる。たしかに、「うれひ」と訓じたからといって、絶対に間違いというわけではない。しかし、動詞の連用形が名詞に転ぜられた以上、そして「うれふ」が下二段活用である以上、一般には「うれへ」と読む習慣だ。実際には「うれふ」の連用形として「うれひ」も古文獻に時おり登場し、「うれふ」に四段活用が存したかと疑われる節もあるのだが、他の活用形が見当たらないため、今のところ確証はない。やはり「うれへ」と訓じておくのが穏当だろう。

訓読には、名詞に関する読み癖が散見される。たとえば、国名「宋」

の下に「人」が着いた「宋人」を「ソウひと」と訓ずるような場合がある。また、「中」「首」も「うち」「かうべ」と訓ずる慣わしである。「なか」「くび／かしら／あたま」とは読まない。こうした読みは十分に注意しておく必要がある。「上／下」の「上／下」をそれぞれ「かみ／しも」と訓読し、ふつう「うへ／した」とは読まぬのも同様である。もっとも、いずれも一般に送り仮名と直接には関係しないので、ここでは特に論じない。

おそらく、送り仮名との関係で、特に意識して覚えておかねばならないのは、読み添えに用いる補読語としての名詞である。一般に、補読語は「助詞・助動詞など」と説明されるが、実は末尾の「など」が曲者で、たしかに助詞・助動詞が大半を占めてはいるが、名詞を読み添える場面も少ないとは言えない。取り立てて意識しておかないと、訓読に難渋することとなる。ただちに思いつくのは、「ひと／こと／とき／もの／かた／たび／まま」などだ。「など」は曲者だと言いながら、自ら「など」と言い添えるのは、ほかにあるかもしれないが、我が知性の明敏ならざるゆえ、差し当たり想い起こすのは当該七語にとどまるとの意である。

①「ひと」読み添えとしては、「或」に添えるのが最も多いだろう。たいいていは「曰」が続くので、左の形式を以て記憶しておけば最も実用的かと思われる。

或^{ルビトク} 曰^{トク} 或るひと曰く

もっとも、常に「或」と「曰」が連続するとは限らず、次のような形式を取ることも少なくない。

或^{ルヒト}問^{ヒト}曰^ク || 或るひと問うて曰く
或^{ルヒト}謂^フ || 曰 || 或るひとくに謂ひて曰く

「或」は不定の観念を表わすため、事に用いられれば「或いは」となるが、人に用いられれば「或るひと」と訓ずることになる。「ひと」に相当する「人」字が見えないので、学生は送り仮名に「ひと」と記すことに對して多大な抵抗を感じるようだ。不定の観念を表わす「或」が時に用いられる場合の「或るとき」については③を参照のこと。

②「こと」読み添えに用いる名詞としては、最も頻出する語であろう。たいていは、文法上の必要から、動詞を名詞化するために用いられる。

飛^{フコト}急^{ハヤ} || 飛ぶこと急なり
禱^{イハヒ}久^{キウ} || 禱ること久し

いずれも「飛」「禱」が主語のため、動詞「飛ぶ」「禱る」のままでは不都合である。主語は名詞と決まっているからだ。そこで動詞に「こと」を添えて名詞化を図る措置にはかならない。英語で動詞を名詞化したとき、^{thing}を付けて動名詞にしたり、^{er}を冠して不定詞(名詞用法)にしたりすると同様の手立てである。

得^{ツク}往^ク || 往くことを得たり
不^レ能^ハ學^ブ || 学ぶこと能はざるなり
勿^レ憚^ル改^ム || 改むるに憚ること勿れ

第一例は、目的語の動詞「往く」を名詞化するための「こと」。古典中国語としての「得」はほぼ助動詞に近い感覚かと思われるが、日本語としては純然たる動詞として「う」と訓ずるしかない。そこで動詞「往く」を目的語として扱うべく名詞化する必要が生じるわけだ。

第二例は「くすること能はず」、第三例は「くすること勿れ」の定式に従った読みである。「こと」を読み添える代表的な言い回しだ。

ただし、この三例の「こと」は、いずれも省略可能であり、「往くを得たり」「学ぶ能はざるなり」「改むるに憚る勿れ」と訓読してもよい。主語の名詞化を除けば、大半の「こと」は省略できると心得ておいて大過ないだろう。

③「とき」物語の冒頭などで、「ある人物が×歳のとき」かくかくしかじかの事件があったと述べる場合、次のように名詞「とき」を読み添え語として加えることがある。「時」字がなくとも、「とき」と添えてかまわない。

王戎七歳^{ノトキ} || 王戎 七歳のとき

すでに①で見た不定の観念を表わす「或」が時に用いられれば、やはり「とき」を読み添えることとなる。

或^{ルトキ}有^リ下^リ涉^ル溝^ヲ盜^ム其^ノ筭^者 || 或るとき溝を涉つて其の筭を盗む者有り

④「もの」それほど頻度は高くないが、読み添え語に「もの」が使われる場合がある。特に「莫」を英語の no one, nobody (だれも) なる

い)に同義と判断したときに用いられ、もし漢字で書けば「者」となることは言うまでもない。

莫^キ我^ヲ知^ル也^夫 我を知るもの莫きかな
莫^シ能^ク仰^グ視^ル 能く仰ぎ視るもの莫し

むろん、「莫」なしでも「もの」を添えて読む場合がある。

今無^シ一人^ノ還^ル 今一人の還るもの無し

一方、漢字で記せば「物」となることもある。「莫」を nothing に同義と解する場合がそれだ。

莫^シ良^キ 於^テ睥^子 睥子より良きものは莫し

右の「もの」はいずれも省略可能。それぞれ「我を知る莫きかな」「能く仰ぎ視る莫し」「今一人の還る無し」「睥子より良きは莫し」と訓読しても差し支えない。「もの」を添えたほうが意味がわかりやすいのはたしかだが。

⑤「かた」 方位に限って用いられる読み添え語で、漢字で記せば「方」となる。方位のみに使われるため、「東^ノカ^タ / 西^ノカ^タ / 南^ノカ^タ / 北^ノカ^タ」の四種しかない。

欲^ス東^ノカ^タ 渡^ラ江^ヲ 東のかた烏江を渡らんと欲す
西^ノカ^タ 出^ツ陽^関 西のかた陽関を出づ

漢文訓読における送り仮名 古田島洋介

⑥「たび」 頻度を表わすべく、数詞に読み添える。漢字で書けば「度」。

三省^タ吾^ル身^ヲ 三たび吾が身を省る

以上のごとき①～⑥の名詞の読み添えは、ほとんどの学生が難渋する訓読である。「人ノ事ノ時ノ者(物)ノ方ノ度」などが記されていないことも読み添えてかまわないということも、ことさらに意識させるよう教えておくのが骨法だろう。④「もの」はすべて省略可能なため、特に知らなくとも訓読作業に重大な支障は来たさないが。

⑦「まま」 稀ではあるが、句型によっては「まま」が用いられる。殊に意識しておかぬと読みに困惑することとなる。〔唐〕韓愈「祭十二郎文」の一句を例に挙げる。

惟^タ其^ノ所^ヲ 願^フ 惟だ其の願ふ所のままならん

〔動詞〕

訓読においてサ変動詞が活躍することは、諸書の指摘するとおりである。ただし、一口にサ変動詞とは言うものの、漢字を音読み・訓読みして「す」を付ける語もあれば、「しとす」「しにす」のごとく、音読み・訓読みに格助詞「と」「に」を補う語もある。それぞれ二例だけ挙げておこう。

音読み十「す」	目 ^ス	目す	辞 ^ス	辞す
訓読み十「す」	以 ^{テス}	以てす	同 ^{ジウス}	同じうす
音読み十「とす」	多 ^{トス}	多とす	異 ^{トス}	異とす
訓読み十「とす」	遠 ^{シトス}	遠しとす	垂 ^{シトス}	垂んとす
音読み十「にす」	急 ^{ニス}	急にす	簡 ^{ニス}	簡にす
訓読み十「にす」	異 ^{ニス}	異にす	擅 ^{ニス}	擅にす

言うまでもなく、サ変動詞のみならず、訓読に登場する動詞の数はおびただしい。その整理を試みても徒勞に終わるだけであろう。そこで、以下、いくつか注意点を列挙してゆくこととする。甚だ不備とはいえ、実用性は十分に見込めるものと思う。

① 固定された読み 一部の動詞については、訓読の慣習として固定した読みが付けられる。虱潰しに調べ上げたわけではないが、学生がよく間違える例を中心に挙げてみれば、次の諸語に注意すべきだろう。

行^ウ / 往^ウ / 之^ウ / 逝^ウ || 行^ウ / 往^ウ / 之^ウ / 逝^ウ

いずれも「いく」とは読まず、「ゆく」と読む習慣である。古来、「いく」と「ゆく」は併用されているが、訓読ではもっぱら「ゆく」を用いる。

食^{ラフ} || 食^クらふ

「食べる」はもちろんのこと、「食ふ」とも読まない。「食す」ならば許容範囲に入るだろうが、一般には「食らふ」と読む慣わしだ。ただし、

「食^レ禄」のような場合は、「禄を食^ハむ」と訓ずる。送り仮名は「食^フ」と付けることも多いが、それでも「食^クふ」ではなく、「食^クふ」と読まねばならない。

出^ツ || 出^イづ
入^ル || 入^イる

「出^デる」「入^ハる」とは読まぬ。特に「入^ハる」は二音節のため、送り仮名は「入^ル」としか付けようがなく、「入^ハる」との区別がつかないので、十分に注意しておくべきだろう。

なお、蛇足ながら、現代語「見出す」は、動詞「見る」の連用形「見^イ」+動詞「出^イづ」の他動詞形「出^イ出す」という語構成である。したがって、「見^イ出^イ出す」という表記は可能だが、「見^イ出す」は誤りだ。現今、大学教員の綴った文章にさえ「見^イ出す」が見出だされるのは、甚だぶざまな話である。

抱^ウ || 抱^イく
埋^{ムル} || 埋^メめる
上^ル || 上^ホる
下^ル || 下^タる

一般に「抱^ダく」「埋^ウめる」「上^{アガ}る」「下^{マダ}る/下^オる」とは読まない。いずれも「抱^ダク」「埋^{ツメル}」「上^ホル」「下^ダル」と送り仮名を付けることは皆無に近い。そのため、「入^ル」と同様、読みには格別の注意が必要である。

このほかにも固定された読みがあるが、動詞の活用形別に記憶してお

くほうが便利なため、次の②③に別扱いしておく。

②カ変動詞は用いず 訓読ではカ変動詞「く」は使わぬ習慣である。したがって、「来」の読みは左のように四段動詞「きたる」を用いる。

来^{クル} 来たる

送り仮名が「来ル」となっていることも多いが、それでも「来る」と読み、「来る」とは読まない。

③ナ変動詞も原則として用いず 訓読では原則としてナ変動詞「死ぬ」「往ぬ」は使わないことになっている。「往」については、すでに①で示したとおり、「往く」と読む習慣だ。「死」はサ変動詞を用いて読む。

死^ス 死す

ただし、歯切れ悪く「原則として」と記しているのは、例外もあるからだ。「往ぬ」は見かけた記憶がないが、「死ぬ」は時として用いられることがある。

鳥之将死、其鳴也哀。人之将死、其言也善。(『論語』泰伯)

鳥の将に死なんとするや、其の鳴くこと哀し。人の将に死なんとするや、其の言ふこと善し。

この『論語』の一則は、ほぼ例外なくナ変動詞「死ぬ」を用いて訓ずる慣習だ。古来、人口に膾炙した名句であるために、「死なんとす」の読みが固定したまま現在に至っているのだろう。「死せんとす」と訓じ

ても、何か支障を来たすわけではないが。

自ら訓読するときにはサ変動詞「死す」を用い、ナ変動詞「死ぬ」が使われていれば、それはそれとして受け入れるとの基本方針でよいだろう。

④補読語 名詞の場合と同じく、動詞の読み添えはよほど意識しておかないと脳裡に浮かんでこない。もともと、読み添えに用いる動詞の数は少なく、「あり」「ふる」「ふく」「なる」「くだらぬものだろう。漢字で記せば、それぞれ「有り」「降る」「吹く」「為る」となる。

「あり」 不利^{アリ} 利あらず

不暇^{アラ} 暇あらず

何面目^{アリテカシ} 見^{イシ}之^シ何の面目ありてか之を見ん

「ふる」 雨^{フル} 雨ふる

雪^{フル} 雪ふる

「ふく」 風^{フク} 風ふく

「なる」 君^{トナリ}国^{ニトスラ}子^ニ民^ニ 国に君となり民を子とす

とりわけ「ふる」「ふく」の読み添えには意を留めておくべきだろう。

「雨」「雪」「風」が動詞として用いられたとき、日本語には適切な訓がない。そこで、やむなく動詞「降る」「吹く」を送り仮名に添えて読むわけだ。

⑤注意すべき活用 今日の一般的感覚とは活用の種類を異にする動詞がある。東京は上野公園内にある不忍池を想い起せば、未然形は「忍ば」、したがって「忍ぶ」は四段活用としか思えないが、訓読では上二段活用として扱う慣わしである。

不_レ忍_レ殺_レ之_二之_一を殺すに忍びず

また、活用行の不安定な動詞に「もちゐる」がある。元来はワ行上一段活用であったが、ワ行「ぬ」・ハ行「ひ」・ヤ行「い」の混同の結果、ハ行上二段に、さらにはヤ行上二段にも活用するようになり、結果として「もちゐる」「もちふ」「もちゆ」の三種が生じた。現行の訓読では、さすがにヤ行「もちゆ」は見かけないものの、ワ行「もちゐる」とハ行「もちふ」が併用されている。ハ行が多数を占め、ワ行は少数にとどまるのが実情かと思われるが。なお、漢字「用」を以て記さないのは、「須」に否定詞や疑問詞を冠した次のような場合にも「もちふ」または「もちゐる」が使われるからである。

不_レ須_レ独_ニ此_一翁_ニ憐_レ 〓 独_レ此_ノ翁_ノ為_ニ憐_レれむを須_レひ〔る〕ず
何_レ須_レ怨_ニ楊_一柳_ヲ 〓 何_レぞ楊_ノ柳_ヲを怨_レむを須_レひ〔る〕ん

さらに注意しておくべきは、他動詞がそのまま自動詞に転用され、結果として活用が異なる場合があるという事実だ。自動詞「横たはる」(ラ行四段・下二段)と他動詞「横たふ」(ハ行下二段)が対になっているかと思いきや、訓読では「横たふ」が自動詞として用いられることがある。誤用と言えば誤用だが、訓読の実態である以上、事実として認識しておかねばなるまい。たとえば、『新編国歌大観』所収『和漢兼作集』巻三(春部下)は、藤原敦宗「春日遊寺」(二九九)の一句を次のように訓読している。

山_ニ当_ニ仏_一閣_ニ翠_一微_ニ横_一 〓 山_ニ仏_一閣_ニに_レ当_レたりて_レ翠_ニ微_一横_タふ

「翠微」が横たわる意でありながら、つまり自動詞「横たはる」を用いるべき箇所でありながら、他動詞「横たふ」を使って読んでいる。芭蕉『奥の細道』の名句「荒海や佐渡によこたふ天河」の自動詞「横たふ」も、訓読の場で生じた他動詞「横たふ」の自動詞化用法の影響なのであろう。

⑥敬語表現 現行の訓読において、敬語表現はほとんど消失しており、敬意を表わす動詞が出現する頻度はきわめて低い。金谷治『訳注』『論語』(岩波文庫、昭和三十八年)は江戸時代の訓読に基づいて、各人物の発言に関し、孔子には「子の曰はく」、曾子には「曾子の曰はく」、その他の人物には「有子が曰はく」のごとき区別を設けているが、今日この種の尊敬表現の工夫は一般に不要とされている。しかし、それでも敬語表現と呼び得る動詞が少数ながら残存していることは事実だ。右の「のたまはく」も完全に滅びたとは言えないだろう。ざっと思いつくままに挙げれば、次のような動詞が敬語表現に当たる。

曰_ク曰_ク曰_ク (おっしゃるには) 尊敬語
在_ス在_ス在_ス (いらっしゃる、健在である) 尊敬語
見_ユ見_ユ見_ユ (お目にかかる、謁見する) 謙讓語
白_ス白_ス白_ス (申し上げる) 謙讓語

右のうち、尊敬語「のたまはく」「います」の使用は任意の措置である。孔子の発言について「子曰く」と訓じても差し支えない。また、「如_ク神_ニ在_ス」(神在すが如くす)や「父母在_ス」(父母在せば)を、「神在るが如くす」「父母在れば」と読んでも十分だ。要は、訓読者の心の持

ちようである。

ただし、謙讓語「まみゆ」「まをす」は、今なおそのまま用いるのが通例だ。

見^ユ將軍^ニ於^ニ此^ニ

將軍^ニに此^ニに見^ユ

有^レ頃^ラ又^ス白^ス「王府^ニ在^レ門^ニ」

頃^ニらく有^リて又^ス白^ス「王府^ニ 門^ニに在^リ」
と。

〔形容動詞〕

訓読の習慣上、漢文のいくつかの形容詞を、日本語としては形容動詞を以て訓ずる場合がある。ただし、形容動詞を日本語の品詞の一として認めぬ有力な説が存在することは承知しており、訓読において、特にタリ活用は漢語に断定の助動詞「たり」が接続したものと見なすほうが合理的であるため、ここでは暫く扱わない。いくつかのナリ活用の形容動詞についてのみ、実用本位の観点から、改めて注意を促しておく。これを知らないと、送り仮名が正確に付けられない。もっとも、注意すべき語として思いつくのは、次の四語にとどまる。

明^ラ明^ラらかなり

平^ラ平^ラらかなり

清^ラ清^ラらかなり

円^カ円^カかなり

それぞれ「あかるし」「たひらなり」「きよし」「まる〔ろ〕し」と読

んでも意味に差し支えが生じるわけではなく、特に後二者「清」「円」は「きよし」「まる〔ろ〕し」と訓ずることも多い。「きよらかなり」「まどかなり」と形容動詞を以て訓ずることも可能だとの話にとどまる。しかし、前二者は、やはり「あきらかなり」「たひらかなり」と読むほうが一般には好まれるだろう。

月明^ラ星稀^{ナリ} 月明^ラらかに星稀^{ナリ}

地平^ラ天成^ル 地平^ラらかに天成^ル (元号「平成」の出典)

言うまでもなく、「月明星稀」は〔三国・魏〕曹操「短歌行」詩に見える甚だ有名な一句である。ところが、あるとき教室で訓読させたところ、「月明かりて星稀なり」と訓じた女子学生がいた。これは私にとつて二重の意味で衝撃だった。一つは、〔宋〕蘇軾「前赤壁賦」に引かれていることでも名高い当該一句の訓読が、まったく次世代に伝わっていないという点である。なぜなら、私自身、高校一年生のとき、漢文の教科書でこの一句を教わって以来(たぶん「主語十述語」構造を反復した四字句として教えられたものと思う)、「月明らかに星稀なり」はきわめて馴染み深い訓読だからだ。これが今や大学生に伝えられぬ時代になったのかと、漢文教育の現状に対して暗澹たる思いを抱かざるを得なかった。もう一つは、女子学生の示した訓読によって、「漢文は文語を用いて訓読する」との説明がいかにも実情と懸け離れているかを改めて思い知らされたという点である。この説明が正しいとすれば、件の訓読は賞讃に値するだろう。「明」を「明かりて」と訓読した女子学生の脳裡には例の『枕草子』冒頭の一節「やうやう白くなり行く山ぎは少しあかりて」が浮かんでいたはずだ。「あかりて」が「明かりて」か「赤りて」

かは暫く問わない。ともあれ、その「あかりて」を「月明星稀」の「明」に応用してみた点で、女子学生の言語感覚は「漢文は文語を用いて訓読する」との説明に忠実に従っている。ところが、それが正解ではないのだ。このような現場での体験からみても、ちびちび小出し派の場当たり説明がいかに重い罪を犯しているか、身に染みてわかるだろう。漢文教育衰退の原因は独り洋風に靡いた世情のみに非ず、その場しのぎの杜撰な説明に終始してきた罰があたった点も大きいのである。

〔助動詞〕

すでに記したように、現行の訓読では過去の助動詞「けり」は使われない。多少とも訓読の実態に通じていれば、現在、訓読ではある特定の助動詞のみを用い、文語の助動詞をすべて使うわけではないとの事実は自明であろう。ところが、いざ、ではどの助動詞を用い、どの助動詞を使わないのか、きわめて具体的な話になると、ほとんどの参考書が何も触れずじまいだ。そもそも、一部の助動詞しか使わないという事実さえ、たいいていの参考書が記していないのである。気の利かぬこと甚し、まったく怠慢としか言いようがない。

管見に入るかぎり、現行の訓読に用いる助動詞の整理を試みたのは、二疊庵主人『漢文法基礎』（増進会出版社、昭和五十二年／〔新訂版第三刷〕昭和六十三年）七〇〜七三頁のみである。今、その所説に些少の修正を加えつつ、再び整理を試みよう。

- ①完了 「り／たり」を用いる。「ぬ／つ」は使われない。
- ②過去 「き」を用いる。「けり」は使われない。

二疊庵主人は、右の二種の助動詞を時間の助動詞としてまとめ、完了「り」のみを使うとし、さらに未来「む」を加えているが、完了「たり」は「得タリ」（得たり）「似タリ」（似たり）のように使われ、また過去「き」も稀ながら「不^レ図」（^レ図らざりき）「不^レ意」（^レ意はざりき）のような定型表現に登場し、さらに稀とはいえ連体形「し」も補読語として現れるので、用いる助動詞に入れておくのが適切だろう。

- ③推量 「む」を撥音化し、「ん」として未来に用いる。「むず／らむ／けむ／めり／らし／まし」は使われない。
- ④打消 「ず」を用い、「じ」も稀に用いる。「まし」は使われない。ただし、「ず」の連体形・已然形は「ざる／ざれ」を用い、「ぬ／ね」は使われない。
- ⑤受身 「る／らる」を用いる。
- ⑥使役 「しむ」を用いる。「す／さす」は使われない。
- ⑦可能 「べし」を用いる。「る／らる」は使われない。
- ⑧断定 「なり／たり」を用いる。
- ⑨比況 「ごとし」を用いる。比況の対象が体言ならば「しのごとし」、用言ならば「し（する）がごとし」となる。「ごとくなり」は使われない。

このほか、尊敬「る／らる／す／さす／しむ」・自発「る／らる」・希望「たし／まほし」・伝聞推定「なり」などは、すべて使われない。結局、現行の訓読に用いる助動詞は合計十三語。稀にしか用いない過去「き」と打消「じ」を除けば、わずか十一語にすぎない。文語の助動

詞はおびただしい数に上るが、漢文訓読ではほんの一部分しか使わないわけだ。

当該十三語のうち、打消「ず/じ」は「不」や再読文字「未/盍」の再読部分の読みに用いられる。補読語として使われることはない。勝手に打消語を読み添えたりすると文意が逆転してしまうから、当然のことだ。

また、受身「る/らる」は「見/所/被」、使役「しむ」は「使/令/遣/教/俾」、可能「べし」は「可」や再読文字「当/応/須/宜」の再読部分、断定「なり」は「也」、断定「たり」は「為」、比況「ごとし」は「如」や再読文字「猶」の再読部分の読みに用いられるが、それぞれ補読語として使うこともある。

一方、完了「り/たり」、過去「き」の連体形「し」、推量「む」の撥音化「ん」は、すべて補読語として用いられる。漢字の読みに充てることはない。

こうした実際の用法をも含めて一覧にすれば、次のようになる。煩を避けて、「漢字」欄には代表的な字のみを掲げ、再読文字その他については省略に従う。

分類	助動詞	漢字	補読語
①完了	「り」「たり」	×	○
②過去	「き」(稀)	×	○
③推量	「む」↓撥音化「ん」(未来)	×	○
④打消	「ず」「じ」(稀)	不	×

⑤受身	「る」「らる」	見	○
⑥使役	「しむ」	使・令	○
⑦可能	「べし」	可	○
⑧断定	「なり」「たり」	也	○
⑨比況	「ごとし」	如	○

ただし、漢字の読みにせよ、補読語にせよ、助動詞をそのまま剥き出しに用いる場合については右の一覧表で整理ができたとしても、定型表現に埋め込まれた助動詞となると、それぞれ例外として個別の注意が必要である。

完了「ぬ」は原則として使わないが、「晋」陶潜「帰去来辞」の「帰去来兮……田園将蕪」の訓読「帰りなんいざ……田園 将に蕪れなんとす」の「なん」、および『左伝』昭公十二年の「已乎」の訓読「已みなん」の「なん」は、完了「ぬ」の未然形「な」に推量「む」の撥音化「ん」が着いたものだ。また、「已矣乎〔夫/哉〕」の訓読「已んぬるか」の「ぬる」は、完了「ぬ」の連体形である。いずれもほぼ固定した訓読ゆえに完了「ぬ」を用いているとの意識は薄い、実際には使っているわけだ。

また、伝聞推定「なり」もそのままの形では登場しないが、「聞説〔道/曰〕」「見説」の訓読「聞説く」「見説く」の「なら」は、伝聞推定「なり」の未然形にはかならない。これも定型表現なので、意識して伝聞推定「なり」を用いているわけではないが、やはり実は使っているのである。

一方、上代の助動詞が訓読に残存している例もある。使役「しむ」も上代語だが、中古以後は滅びた純粹に上代の助動詞としては受身「ゆ」が指摘できるだろう。「所謂」「所有」の訓読「いはゆる」「あらゆる」の「ゆる」が受身「ゆ」の連体形だ。後者「所有」は稀にしか目にせず、さすがに継続「ふ」も見た記憶がないが。

右の例外のうち、送り仮名に関係するのは完了「ぬ」のみ。さして神経質になる必要はない。いずれも定型表現なのだから、暗記さえしておけば用は足りる。ただし、意識せぬところに本来は使わないはずの助動詞が用いられている事実は、一応わきまえておいたほうがよいだろう。

〔助詞〕

助詞については、整理を試みた例を知らぬ。助動詞に関する整理を試みた二畳庵主人『漢文法基礎』（前掲）も、訓読において「特に重要なものは、ば・ども・ともの三種である。この三つの助詞に対する理解があれば、あとの助詞については、ほとんど、現代口語の常識から推測して使って大丈夫である」（七三頁）と述べるのみだ。二畳庵主人が「ば」を取り上げているのは、例の仮定条件「未然形+ば」と確定条件「已然形+ば」の問題があるからだ。これについては、後述の「四 訓読の文法」で言及することしよう。また、「ども」ともを取り上げているのも、仮定条件「未然形+ども」と確定条件「已然形+ども」の問題があるからだ。これに関しては左で触れることとする。

以下、助動詞と同様の方式で整理を試み、注意点などを添えてゆく。

①格助詞 「が／の／を／に／と／より／にて」を用いる。「つ／へ／

から」および上代語「よ／ゆ／ゆり」は使わない。

・主語に「が」を付けることはない。「誰が／誰家」（誰が為にか／誰が家にか）のように、「が」はもっぱら連体修飾語の形成に用いる。「の」もしばしば連体修飾語の形成に用いられるが、「吾道」「為我」のごとく修飾語が代名詞の場合は、「が」を使って「吾が道」「我が為に」と訓読し、修飾語が一般名詞のときは、「の」を用いる。

・帰着点のみならず、方向にも「に」を用いる。方向を表わす場合でも「へ」は使わない。

・起点・経由地には、もっぱら「より」を用いる。「から」は使わない。

・場所・範囲などには「にて」を用いる。この二字を縮約した「で」は使わない。

・「と」同じである「意の「同と」を返り読みするときは、「と」同じ」と訓読し、「とと同じ」とは読まない。「同右」は「右に同じ」と訓読するのが正しいわけだ。

・「為」を英語 become と同義に「なる」と訓ずるときは、「とと為る」と訓読し、「とに為る」とは読まない。

・「象」は、以前は「とに象る」がふつうであったが、最近は「とを象る」という訓読も見かける。「かたどる」は形を取る意で、直接目的語「かた」を含む語ゆえ、間接目的語には「に」を付けて「とに象る」と訓ずるほうが好ましいだろう。

・たとえ「聴従」という熟語動詞が目的語「其意」を伴った場合は、「其の意を聴従す」とも「其の意に聴従す」とも訓読できる。「聴」の訓「聴く」を念頭に置けば「とを聴く」、「従」の訓「従ふ」を優先すれば「とに従ふ」となり、日本語に助詞「を／に」の連語「にを」または

「をに」が存在しない以上、どちらか一つを選ばなければならないからだ。

なお、「の」は「之」、「と」は「与」、「より」は「自／從／由」の読みに用いられる。

② 接続助詞 「ば／も／ども／にて／して／ながら」を用い、稀に「とも／を」も用いる。「ど／が／で／つつ／ものから／もの」は使わない。

・以前は仮定条件「終止形＋とも」と確定条件「已然形＋ども」の読み分けが行われていたが、逐一いずれなかを判断するのも煩わしく、どちらか明確でない場合もあるため、最近では仮定条件も確定条件も「已然形＋ども」を以て訓読してしまうのが一般である。「雖」の訓読みを問われれば、だれもが「いへども」と答え、「いふとも／とも」は脳裡に浮かばないだろう。「とも」は稀にしか見かけない。

・「も／を」をそのまま露骨に逆接の意で使うことは少ない。「然(而)」「然(而)も」「然(而)」「然(而)るを」のように定型表現において使うのがふつうである。ただし、「も」は単に「しするも」のごとく訓じて逆接に用いる場合がある。逆接は、「ども」を使って「しすれども」とも読むが。

・「ながら」を独立して使うことはない。「而(ツナガ)」「而(ツナ)ながら」「生(マレナガ)」「而(生)ながらにして」「居(坐)」「居(坐)ながらにして」などの定型表現においてのみ用いる。

なお、「ども」が「雖も」の読みに用いられる以外は、すべてもっぱら補読語として用いられる。「乍」を「ながら」と訓ずるのは国訓。

③ 係助詞 「は／も／ぞ／や／か」を用いる。「なむ／やも／やは／かも／かは／こそ」は使わない。

・「は」は、主語を取り立てて示す場合に用いる。要するに比較・対照のために「は」を用いるのであり、単に主語だからという理由で「は」を付けることは好まれない。ただし、比較・対照の観念がなくても、単に口調を滑らかにすべく、主語に「は」を付けることがある。また、「は」は、「不(ニ)常(ニ)有(ニ)」「常には有らず」「不(ニ)重(ニ)来(ニ)」「重ねては来(ニ)たらず」など、いわゆる部分否定にも用いられる。

・文語文法どおり、文中の「ぞ／や／か」は連体形の係り結びを起こす。「こそ」は使わないため、訓読における係り結びは連体形のみであり、已然形の係り結びは生じない。

・「や／か」は、いずれも疑問・反語を表わす。

なお、「は」は「者／也」、「や／か」は「也／乎／邪／耶／哉」などの読みにも用いられる。

④ 副助詞 「すら／のみ／ばかり／まで／しも／さへ」を用いる。「だに／など」は使わない。

・「など」を使わないとしたのは、名詞に着く「等」は、一般に訓「ら」または音「トウ」を以て訓読するのが通例かと思われるからである。「など」と読む人がいるかもしれないので、決めつけるつもりはな

いけれども。

・「ばかり」は概数を表わす。現代口語の「だけ」に当たる限定の意には用いない。

・「まで」は「自(リ)ニ至(ル)マデ」(しより…に至るまで)の表現に登場するのみかと考える。稀に使うだけと考えると大過あるまい。

・「しも」も「不(ニ)必(ニ)し(ニ)」「(必ずしもしせず)の表現で目にするだけであろう。

・「さへ」も同様で、「剩」の訓読「あまつさへ」で見かけるのみだ。

ちなみに、「つ」は「あまりさへ」の「り」の促音便である。

なお、「のみ」は「而已(矣) / 耳 / 已 / 爾」など、「ばかり」は「許 / 可 / 所」の読みにも用いられる。「迄」を「まで」と訓するのは国訓。

⑤終助詞 「か / かな」を用いる。「な / ね / なむ / なも / ばや / かし / し / が / し / が / な / し / が / も / も / が / な / も / が / も / か / も」は使わない。

・「か / かな」は、いずれも詠嘆を表わす。

なお、「か」は「也 / 乎 / 邪 / 耶 / 哉」など、「かな」は「哉 / 夫 / 乎 / 矣」などの読みにも用いられる。

⑥間投助詞 「や / よ」を用いる。「を / し」は使わない。

・「や」は、詠嘆・提示・呼びかけなどに用いる。

・「よ」は、呼びかけに用いるのみ。

なお、「や」は「也 / 乎 / 邪 / 耶」など、「よ」は「也 / 乎」の読みにも用いられる。

右を簡略な一覧表にまとめれば次のようになる。「ばかり」以外は、すべて読み添えに用いることができるため、「補読語」欄は省略する。

種類	助詞	漢字
①格助詞	「が」 「の」 「を」 「に」 「と」 「より」 「にて」	之 与 自・従・由

②接続助詞	③係助詞	④副助詞	⑤終助詞	⑥間投助詞
「ば」 「も」 「ども」 「に」 「て」 「して」 「ながら」 「とも」(稀) 「を」(稀)	「は」 「も」 「ぞ」 「や」 「か」 「すら」 「のみ」 「ばかり」 「まで」 「しも」 「さへ」 「か」 「かな」 「や」 「よ」	「は」 「も」 「ぞ」 「や」 「か」 「すら」 「のみ」 「ばかり」 「まで」 「しも」 「さへ」 「か」 「かな」 「や」 「よ」	「ば」 「も」 「ども」 「に」 「て」 「して」 「ながら」 「とも」(稀) 「を」(稀)	「よ」
(然・而) (雖)	(然・而) 者・也	也・乎・邪・耶・哉 也・乎・邪・耶・哉 而已(矣)・耳・已・爾 許・可・所 (自・至・…) (不必) (剩)	也・乎・邪・耶・哉 哉・夫・乎・矣 也・乎・邪・耶	也・乎

語数が多いため、助動詞ほど明快な印象はなく、不備も多いかと案ずるが、少なくとも、用いるはずのない助動詞を使って訓読に及ぶ弊は防げるだろう。

もっとも、名詞・動詞・形容動詞・助動詞・助詞の五品詞についてざっとまとめてはみたものの、これだけで何とか訓読できるかというところでは問屋が卸さない。補足事項を二つ述べておこう。

第一は、実際の訓読では、たとえば助動詞と助詞、または助動詞どうし、助詞どうしを組み合わせた連語が頻用される。したがって、単に助動詞と助詞をそれぞれ記憶してみても、応用には支障を来たす危険性が高いのだ。そこで、頻出する連語を左に掲げてみよう。訓読口調の形成には、連語の響きが大きく与っている。

最も出現率が高いのは、助詞「して」を用いた連語であろう。
ずして・にして・として・をして

「ずして」は、打消「ず」の上に各種の用言の未然形を冠することができるので、おそらく最も応用範囲が広い。「をして」は、使役形において使役の対象に必ず付ける送り仮名だ。「にして／として」も頻出する。

「ごとし」には、前述のように「の／が」を冠した二種の用法があるが、それをも含め、よく見かける連語を示せば――

- くの(体言)のごとし・くする(用言)のごとし
- ざるがごとし・なるがごとし・たるがごとし

「んと」の組み合わせにサ変動詞の着いた「んとす」も重要だ。

(せ)んとす・しめんとす・ならんとす・たらんとす

「に」が撥音化した「んに」「ぞ」が着いた「んぞ」や、「に」と「か」の組み合わせも、次のような訓読語を形成するので、ぜひ覚えておかねばなるまい。代表的な漢字を添えておく。

いづくんぞ_ニ寧_シ・焉_シ
いづくにか_ニ安_シ

反語形には必ずと言ってよいほど「んや」が用いられる。打消「ず」との組み合わせで示してみよう。抑揚形でも「んや」が多用され、しばしば「をや」と呼応する。

敢_{ヘテ}へて走らざらんや_ニ敢_{ヘテ}不_レ走_ラ乎_ヤ
況_シんや人に於てをや_ニ況_シ於_レ人乎_ニ

疑問形に「をか／ぞや」が添えられることもある。「をか」は反語形の訓読にも必要だ。

なにをか_ニ何_カ
なんぞや_ニ何_カ

比較形・選択形には「よりも／よりは」が欠かせない。

霜葉は二月の花よりも紅なり
|| 霜葉紅ニ於二月花^{ハナリ}

其の不孫ならんよりは、寧ろ固なれ || 与^{リハ}其不孫^{ナラン}也、寧固^{コナレ}

このほか、次のような連語もしばしば目にする。

ざらしむ・ならしむ・たらしむ

しめず・べからず・ならず・たらず

しめじ

なるべし・たるべし

しめば・なれば

たれども・ざれども・なれども

ずや・なりや

ざるは・ごときは

ざるか・なるか

しむるのみ・なるのみ

なお、「ずんば／べくんば／ごとくんば」については後述の「三訓読の語法」において言及しよう。

第二は、名詞が副詞に転用され、動詞の修飾語となった場合に用いる特殊な送り仮名である。これは特例中の特例として記憶しておかないと、途方に暮れる可能性が高い。左に見てゆくように、たいていの語は音読みですませられる。しかし、語義を明確にするためにも訓読の知識は欠かせまい。おおむね三種に分かつことができよう。

一つめは、名詞が比喩・様態を表わす場合である。副詞化された名詞に助動詞「ごとし」を添えて訓読する。

蛇^{ノコトク}行^ク || 蛇のごとく行く

蝟^{ノコトク}集^{マル} || 蝟のごとく集まる

*「蝟」はハリネズミ。その針のような多数の毛を念頭に置いて

雲^{ノコトク}散霧^{ハク}消^ユ || 雲のごとく散り霧のごとく消ゆ

二つめは、名詞が手段・方法を表わす場合である。副詞化された名詞に「もて」を添えて訓読する。名詞の上にあるべき「以」が省略された

ものと見なし、「以^テN^ヲ」と訓読する心持ちで臨めばよい。ただし、助詞「を」は省き、「もつて」の促音も消して、名詞に直接「もて」を付ける。

文^{モテ}化^ス || 文もて化す

*文徳によって教化する意。「文化」の本来の語義である。「以^テ文^ヲ教化^ス」(文を以て教化す)を脳裡に描いて訓読すればよい。

管^{モテ}見^ル || 管もて見る

*狭い管を通して広いものを見ようとする意。すなわち、自身の見解を謙遜するという語。「以^テ管^ヲ見^ル之^ヲ」を念頭に置いて訓読する。同義の「管窺」も「管もて窺ふ」と訓読できる。

拳^{モテ}撃^ツ || 拳もて撃つ

*拳骨で殴る意。現代中国語ではボクシングの訳語として用いる。「以^テ拳^ヲ攻撃^ス」を思い浮かべて訓読すればわかりやすい。

現代日本語を用いれば、それぞれ「文で化す／管で見る／拳で撃つ」と読める。しかし、すでに助詞の解説に記したごとく、訓読では助詞「で」を使わない習慣のため、「もて」を添えて読むわけだ。

なお、日本語では、古くは促音を表記しないことも多かったため、先人の「もて」は、実際には「もって」と発音していた可能性もある。けれども、それを引き継いだ結果、今日「以」は「もって」、右のような送り仮名はそのまま「もて」と読み、促音の有無によって発音に明確な区別が生じることとなった。

三つめは、名詞が資格・身分を表わす場合である。副詞化された名詞に「として」を添えて訓読する。

客 トシテ 死 トシテ 客として死す

* 旅先で死ぬ意。「客」は旅人の意味である。

君 トシテ 臨 トシテ 君として臨む

* 君主として臣下・民衆に臨み、国家を治める意。君主でもない者が君主のようにふるまっている場合は、批判の意を込めて「君 トシテ 臨」とも訓読できる。

師 トシテ 事 トシテ 師として事ふ

* 師と仰いで仕える意。右の二例は「ある者が〈客として死す〉」「ある者が〈君として臨む〉」意であるが、これは「ある者が〈師として事ふ〉」意であり、師たる者と仕える者が別人物だという点で、「客死」「君臨」とは趣が異なる。ただし、名詞に「として」を送って訓読する点は同じなので、一括りにして覚えておくのが便利だろう。もしかすると、「師」は名詞と解するよりも、むしろ動詞「師とす」と解釈するほうが妥当かもし

れないが。類例に「兄事」があり、これも「兄として事ふ」と訓読できる。

三 訓読の語法

訓読には、取り立てて心得ておくべき語法があり、これを曖昧なままにしておくと、送り仮名の理解に支障を来たす。いかにも漢文訓読らしい送り仮名として繁く登場するに於ては、学生たちの認識が薄い。少なくとも左記の二点について十全な指導が必要であろう。

①上代ク語法の残存 上代に活躍したク語法、すなわち準体助詞「く／らく」を用言に付けて体言化する語法は、平安時代以降、大幅に衰退することとなったが、漢文訓読のなかで命脈を保ち、現行の訓読でもふつうに用いられる。現代語としては「思わく／老いらく」などもその例だ。「く」は未然形に、「らく」は終止形（上一段動詞ならば未然形）に接続するが、訓読では次のような語を意識しておかねばなるまい。

- 曰 いは く (「いふ」未然形＋「く」)
- 以 おも く (「おもふ」已然形＋完了「り」未然形＋「く」)
- 聞 き く (「きく」終止形＋伝聞推定「なり」未然形＋「く」)
- 願 ねが く (「ねがふ」未然形＋「く」＋係助詞「は」)
- 疑 うた く (「うたがふ」終止形＋「らく」＋係助詞「は」)
- 恐 おそ く (「おそる」終止形＋「らく」＋係助詞「は」の縮約形)

ちなみに、今日でも引用の「曰」を「言うことには」と訳す人が少なくない。学生たちも、中学・高校時代に習った先生の影響なのか、「言うことには」と訳すことを好む。これは古典中国語「曰」の訳というよりも、その訓読「いはく」の訳と称すべきだろう。古典中国語「曰」の訳としては「言った」で十分のはずだ。先に日本語では用言に「こと」を添えて名詞化すると記したが、上代には「く／らく」を付けて名詞化する語法が存在したわけである。

②中世連語「ずんば」の混入 中世以降に見られる連語「ずんば」も訓読には欠かせない。これは、〈打消「ず」連用形+係助詞「は」〉に撥音「ん」が介入し、「は」が連濁によって「ば」と化したとも、〈打消「ず」未然形+接続助詞「ば」〉に撥音「ん」が介入したものと解せられる。

虎穴に入らずんば、虎子を得ず 不_レ入_ニ虎穴_ニ、不_レ得_ニ虎子_ヲ
敢へて勉めずんばあらず 不_ニ敢_{ヘテ}不_レ勉_ム

第一例は「入らざれば」と訓読してもよい。一見、「ずんば」は必須の知識でないようにも思われる。しかし、第二例の「不敢不」は必ず「敢へて（せ）ずんばあらず」と読む習慣だ。やはり「ずんば」は不可欠なのである。

ついでに、「なくんば／べくんば／ごとくんば」の三語を、「ずんば」の類例として指摘しておこう。いずれも訓読特有の送り仮名が必要だ。

なくんば

民に信無くんば、立たず 民無_レ信、不_レ立_ツ

べくんば

不仁にして与に言ふべくんば、則ち何の国を亡ぼし家を敗ること

か之有らん

不仁_{ニシテ}而可_ニ与_ニ言_フ、則何亡_レ国敗_レ家之有_{ラン}

ごとくんば

此の如くんば則ち天下に敵無からん 如_ク此則無_レ敵_ニ於天下_ニ

第一・二例は、それぞれ「民に信無ければ／不仁にして与に言ふべければ」と訓読してもよい。けれども、第三例を「此の如ければ」と読むのは不可だろう。比況「ごとし」に已然形は存在しないからだ。もし、どうしても「くんば」を嫌うのであれば、「ごとし」に断定「なり」を加えて、「此の如きなれば」と訓読するしかあるまい。これを「此の如くなれば」と読むと、比況「ごとくなり」を用いていることとなり、現行の訓読の習慣に合わなくなる。

右に①上代ク語法の残存、②中世連語「ずんば」の混入などと記したことから逆に察せられるように、要するに、訓読に用いる文語とは、一般に謂う古文と同じく、中古すなわち平安朝の古文を基準としているのである。ただし、上代から現在に至るまで一千数百年にわたって受け継がれてきた営みだけに、訓読には中古語法では律しきれない側面があるわけだ。むろん、この話は文法にも当てはまる。それを最後に述べてみよう。

四 訓読の文法

訓読は中古文法を原則としつつも、時として上代文法が残存し、近世文法も混入する。前者は単なる活用形の問題だが、後者は通常の文語文法の常識を覆す側面を持つ。

①上代文法の残存 上代には、形容詞「なし」の未然形として「なけ」が、助動詞「べし」の未然形として「べけ」が存在した。訓読では、これに推量「む」の撥音化した「ん」を付け、「なけん／べけん」と訓ずることがある。中古文法に則れば、もちろん「なからん／べからん」となる。簡略にまとめれば、次のごとくである。

	上代文法	中古文法
なし十ん	なけん	なからん
べし十ん	べけん	べからん

〔唐〕白居易「長恨歌」末尾の一句「此恨綿綿無絶期」を、私は次のような訓読で記憶している。高校時代の漢文教科書がこのように訓読していたからだ。

此の恨みは綿綿として絶ゆる期無けん

ただし、最近の教科書は中古文法によって「……絶ゆる期無からん」と訓ずるのが一般だ。「べけん／べからん」についても同様で、近時は

「べけん」よりも「べからん」のほうが好まれていように見受けられる。

けれども、私個人は「なけん／べけん」を訓読に特徴的な読みとして、ぜひ保存してゆきたいと考える。できるだけ中古文法を以て統一しようとする心情は理解に難くない。生徒たちが手にしている文語文法の活用表は中古文法を基準としており、その未然形の欄に「なけ／べけ」は見えないからだ。活用表にない語形を用いて訓読を教えるとなれば、たしかに抵抗を覚えざるを得まい。

しかし、説明の便宜を図るべく、意識して「なけん／べけん」を避けるのは本末転倒ではないか。訓読の事実こそ優先すべきであり、説明は事実に応じて工夫するまでである。「なるべくわかりやすく」は、説明の工夫において発揮すべき精神だ。事実そのものを不当に簡略化し、以て説明に便ならしめんとするのは、教える身として邪道に踏み迷う行為にほかなるまい。

②近世文法の混入 仮定条件「未然形十ば」と確定条件「已然形十ば」の区別は、文語文法における花形だ。この区別は、文語文法の要点として、だれしも記憶にはげんだ経験があるだろう。

ところが、これはあくまで中古文法での話であり、近世文法では、特に近世後期になると、已然形が今日の口語文法に謂う仮定形に接近し、「已然形十ば」が仮定条件をも表わすようになる。確定条件は従来のまま「已然形十ば」であるから、要するに仮定条件と確定条件の読み分けが消失し、いずれも「已然形十ば」で表現する傾向が強くなってきたわけだ。そして、この影響が漢文訓読にも及び、そのまま近代以降に引き継がれた結果、現行の訓読では、仮定条件にせよ確定条件にせよ、「已然形十ば」を以て訓ずることが許容されている。やはり簡略にまとめれば、次のようになる。

仮定条件	中古文法	近世文法
確定条件	未然形＋ば 已然形＋ば	已然形＋ば (同右)

ただし、これについても、最近は中古文法によって読み分ける傾向が強い。それはそれで結構だろう。けれども、いずれの条件も「已然形＋ば」ですませてしまう読み方は、現行の訓読にまで流れ込んでいる。それが偽らざる実態である以上、我々は常に寛容を以て臨まねばなるまい。二つの条件を読み分けていないからといって、文法違反だと決めつけるわけにはゆかぬ。実際、何も好んで煩わしい読み分けに立ちもどる必要はあるまい、というのが愚見である。仮定条件なのか確定条件なのか、明確な判断を下せない場面も少なくないのだから。

以上、すっかりした体系的な説明を指向しつつ、結局は雑然たる印象になってしまったかもしれぬが、関係各位が漢文訓読の送り仮名を教えるさいに、また、送り仮名について考えるさいに、些少とも役に立つところあらば幸いである。

事、送り仮名に及ぶと、ただちに不統一の問題を俎上に載せ、どこから送るか、どこに送るかについて議論を戦わせるのが通例であろう。どこから送るかとは、既述のごとく、「曰」か「曰」かのような問題を指す。副詞「甚」で「だ」を送り、形容詞「甚」で「だ」を送らないのは不統一だ——このような意見を耳にしたこともある。けれども、これまたすでに述べたように、どこから送ろうと、結果として「いはく」と読

み、「はなはだ／はなはだし」と読むことに変わりはない。

一方、どこに送るかとは、たとえば助詞「や」を、左の上のごとく直接「乎」の読みとするか、下のように「乎」を置き字扱いして「不」に送り仮名として付けるかのごとき問題を指す。

不ニ亦タ樂シ乎カラ 不ニ亦タ樂シ乎カラ

しかし、これについても、結局は両者ともに「亦た樂しからずや」と読むこととなり、送り仮名「ヤ」の位置によって何か解釈上の差異が生じるという話ではない。どこから送ろうが、どこに送ろうが、送り仮名の本質とは何も関係がないのである。あくまで体裁上の不統一の問題にすぎない。

私見によれば、訓読の送り仮名について最も重要なのは、どのような語をいかなる点に注意して送るのか、という問題である。これこそが訓読における送り仮名の骨法だと称してよいだろう。「古語を用い、文語文法に従って読む」では、あまりに大ざっぱな説明だ。また、事あるごとに「助動詞へけり」は使わない、「起点を表わす助詞はへから」ではなく「へより」を用いる」などと断片的な知識を小出しにしてゆくのも感心しない。なんとか全体の見取り図が明確に描けないものか。本稿はその試みの第一歩である。多々存在するであろう不備や錯覚については、ぜひとも御批判・御教示を賜りたい。

注

(1) 原田種成『私の漢文講義』(大修館書店、平成七年) 四九頁。原田氏は、「猶、亦などの〈なお〉〈また〉は本来読み仮名で送り仮名ではないが、読み誤らないように最後の一字を添えることがあり、〈故・將・唯・猶・亦〉の類の仮名は添え仮名という

のが適当である(傍点原文ママ)と記し、さらに(参考)として、「明治四十五年三月二十九日の官報に(漢文の句読点添仮名読方法)が掲載されている。そこには(添仮名)とあって(送仮名)と書いていない。漢文の場合は読み誤らないように添えた仮名であるから(添仮名)というのが正しい。この後の正しい用法が用いられていないのは不思議である」と述べている。おそらく、原田氏は、読み仮名が送り仮名の領域に漏れ出したものを添え仮名と呼ぶべきだと主張しているのであろう。けれども、本稿で述べたように「添え仮名」という呼称には語弊の生ずる可能性があり、また、「読み仮名で送り仮名ではない」と、送り仮名の存在を認めているかのように記しながら、「(添仮名)とあって(送仮名)と書いていない。……(添仮名)というのが正しい」と、送り仮名という呼称を排して添え仮名と呼ぶべきだと言っているように聞こえる点で、今一步その主張に明確な点が残る。こうした全体的見取り図を示さずに一部分の呼称の変更を求める原田氏の態度には、やはり従来の漢文教育のちびちび小出し法と同様の通弊を感じる。

ただし、原田氏の記す呼称変更の要求は、送り仮名について再考する絶好の機会を与えてくれる性質の提言であり、長年の経験に裏付けられた碩学の言として傾聴に値する。少なくとも一度は正面切って検討するだけの価値を有する提言だろう。けれども、管見の及ぶかぎり、原田氏の提言を真摯に受け止めた論考は見当たらない。この一事にも、漢文教育関係者の知的怠慢が見られるように思う。むろん、これは自戒の言でもあるが。

(2) 今、慎重を期して尊敬の助動詞「る／らる」は使わないとしておくが、これはあくまで一般論であり、かつ語法上の検討の余地を多分に残している。たとえば、小川環樹・都留春雄・入谷仙介「選訳」『王維詩集』(岩波文庫、昭和四十七年)一四七頁は、詩題「鄭果州相過」を「鄭果州相^あい^よ過^らる」と訓じ、「(相過)は立ち寄ってくださったの意」と解説する。詩題の訓読「過らる」の「る」は明らかに尊敬の助動詞である。個別に見れば、このように尊敬の助動詞「る」を用いた訓読もあるわけだ。ただし、これが一般的な訓読であるかは疑問であり、単に「相ひ過る」と訓ずるのが通例かと思う。また、当該書が「過らる」と訓読したのは、一本に「相過」を「見過」に作るからかと推測するが、語法上、動詞に冠せられた「見」が受身か尊敬かは検討に値しよう。同書五四頁は詩題「酬諸公見過」を「諸公の過らるるに酬め」と訓読し、「見」を尊敬の意に解して、尊敬の助動詞「る」を充てているようだが、この種の「見」にそのまま尊敬の意味を認めるか、それとも、あくまで受身と解し、たまたま害悪を受ける意ではなく、恩恵を受ける意のために、結果として尊敬とも解せると考えるのか、未だ定見を得ない。いずれを採るかによって、受身の「る」を充てるか尊

敬の「る」を以て訓ずるか、結果が異なることになろう。暫時ここに記して後考を俟つ。

*本稿は、明星大学「特別研究期間制度」に基づき、平成十六年二月二十六日(七月十四日)、北京日本学研究中心(北京日本学研究中心)に出張したさいの研究成果の一部である。